

研究のポイント

学校をめぐる様々な問題は、ともすれば、学校の内部の要素だけで語られがちだ。しかし、学校が社会を支える多数のシステムの一部だとするなら、それは否応なしに社会全体の動きと密接に関連せざるを得ない。本稿は学校の問題を社会全体の広がりの中で眺めてみるという試みである。もちろんこれは一つの仮説の流れであり、学校と社会との関連性は他にも様々なものがある。他の可能性についても考察しながら一読していただきたい。

研究を終えての感想

青少年が何かの事件の主役になるたびに、学校がやはり玉にあげられる。その現象の本当の原因の吟味はさておき、とりあえず、学校のありかたが批判される。そして社会全体がちょっとしたカタルシスを味わつて、事件は忘れられる。まったく学校は損な役目を担っている。カタルシスを得ることと、問題の解決とは別のことだという、あたりまえの出発点を確認するのに、本稿が多少なりとも役立てば幸甚である。

研究レポート3 <場の社会史からみた動機づけのメカニズムの研究>

ネットワーク化社会の動機づけ

～他者の視線のない
生活空間をめぐる問題～

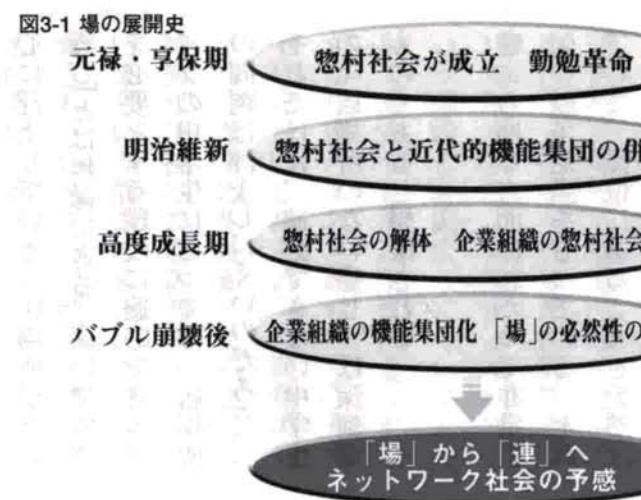
ライズコーポレーション代表取締役 岩間夏樹

「場」と「意欲」

「場」という言葉にはどこか和風の匂いがつきまとつ。「その場の雰囲気を察する」「場をはずす」「場数をふむ」などなど。我々が今なおもち続けている、感受性の深いところにある琴線を刺激する言葉だ。この感覚に忠実に従い、本稿においては「場」という言葉を、日本人の生活空間が長くもち続けた特性を象徴する用語として位置づけ、そして、今、我々が直面している様々な問題を、この長年親しんだ「場」という生活空間を卒業し、よりネットワーク的な社会——ここでは仮に「連」と対比的に名づける——を志向しつつある転換期のものととらえてみる。そして、そういう社会状況と関連するものと

して、中学生が生きる空間をスケッチしていく。

本稿で扱うもう一つの素材が「意欲」である。社会学の用語で置き換えるなら「動機づけ」あるいは「モチベーション」だろうか。近代的な産業社会が出発するためには、勤労が積極的に動機づけられるメカニズムが前提として必要だとされるが、日本においては、この動機づけと「場」とが密接に関連している。そもそも日本人が初めて「場」と呼べるような安定した生活空間に生きるようになったのはそう昔のことではなく、惣村社会が成立した元禄・享保の頃である。そして、この時、軌を一にして「勤勉革命」が起きた。固定的な生活空間の中で、相互監視や競争心の網に覆われることで、我々は勤勉性



- 若者組/娘組
- 寺子屋
- 藩校
- 「場」の動機づけによる近代的生産
- 日本特有の学校文化
- 「場」を獲得するシステム
- 学校文化の退行現象
- 「世間」から「市場」へ
- 動機づけの機能不全
- 既存の生活空間からの離脱
- シェルターへの内閣

を学習した。このことは、いわゆる企業一家意識に見られるような、つい最近の現象にまで長く我々に影響を与えてきた。およそ300年を経て、ようやく「場」を卒業しつつある今、「連」の中でどのようにして動機づけを獲得するかが課題として浮上している。昨今の中学生をめぐる様々な問題も、基本的にはこのような大転換期に付随するものだと考えてよからう。

調査結果からの印象

本研究では、このような視点から、ファクツファインディングの試みとして小規模な調査を実施した。100サンプル程度の、少數ではあるが、フリーアンサー主体の質問紙法調査と、10人程度に対する

するグループインタビューである。もちろん、調査対象はいずれも中学生である。印象を一言で要約すれば、中学校という環境は社会一般から見て非常に特殊なものになっているということだ。具体的には以下のように整理される。

●中学生は基本的には家庭と学校を往復する生活をしており、学校にかなり強い帰属感をもつていて。これは、家庭にも学校にも「居場所」を見いだしていない多くの高校生のライフスタイルとは非常に対照的である。発達段階の問題も関係しているだろうが、中学校といふ環境が高い帰属感を前提としている印象がある。

●これと関連するが、高校生を中心とする

●中学生は基本的には家庭と学校を往復する生活をしており、学校にかなり強い帰属感をもつていて。これは、家庭にも学校にも「居場所」を見いだしていない多くの高校生のライフスタイルとは非常に対照的である。発達段階の問題も関係しているだろうが、中学校といふ環境が高い帰属感を前提としている印象がある。

●中学生は基本的には家庭と学校を往復する生活をしており、学校にかなり強い帰属感をもつていて。これは、家庭にも学校にも「居場所」を見いだしていない多くの高校生のライフスタイルとは非常に対照的である。発達段階の問題も関係しているだろうが、中学校といふ環境が高い帰属感を前提としている印象がある。

ルな場面では、序列意識が非常に強く、あらゆる項目について自分の位置づけが精密に把握されている。同調志向と強い競争意識という二つの矛盾するものが「タテマエ」と「本音」として両立し、インフォーマルな場面での序列関係を非常に厳しいものにしている印象がある。

●互いに傷つけないように細心の注意を払いあつてている。これには、

が関係しているものと思われる。終身雇用制時代の職場の対人関係に見られたような息苦しさを、中学生はいまだに学校で経験している。

「場」なき時代に生まれ育った彼らにとって、その負担は我々が想像する以上のものだろう。

●教師がコミュニケーション可能な相手として信頼されていない。少數のサンプルから得られた結果ではあるが、生徒と良好なコミュニケーションをもち、生徒から信頼されている教師は例外的である。学校運営において「本音」と「タテマエ」との間にかなりのギャップがあることが関係している可能性がある。

中学校という特殊な環境

以上を総合して中学校という環境をごく大まかに描写すると以下のようになるだろう。中学校は今や社会全体から見れば例外的に「場」の要素を色濃くもつており、それを背景とする平等な関係という前提の中で、むしろ逆に生徒たちはものと思われる。

心に浮上している「居場所がない感じ」とは無縁である。高い帰属感を必要とする環境に適応できるタ

イプの中学生にとっては、居場所

の問題は浮上しにくいのだろう。

それだけに、適応できない中学生の「居場所のない感じ」は深刻なものであると想像される。

●あらゆる方面にわたって非常に突出を嫌い、均質であることが是とされる文化があり、平等という価値観が、機会や権利の問題ではなく、結果の均質性にまで及んでいる。しかし反面、インフォーマルな形で非常に強く序列化されている。また、教師は今なお伝統的な教師像を演じようとしている。これを軸としてコミュニケーションを成立させようとする傾向がある。このような「場」が内蔵する序列性の構造に適応できる生徒たちにとって中学校は比較的住みよい場所であり、「居場所がない」という問題も表面化しにくい。しかし、適応できない生徒にとってはかなりのストレス源になつておらず、不登校やいじめといった現象の背景は、全ての生徒が、このような特異な学校への適応能力をもつてゐるという前提のもとに学校が運営されていることが関係しているものと思われる。

中学校に特有の問題のかなりの部分は、中学という環境が社会一般の環境とかけはなれたものについていることに原因があると考えていいだろう。

この特殊性ため、中学校という環境に適応するのに中学生たちは多大な労力を払う必要に迫られており、高校に入るや突如として学校文化への適応をあきらめ、ピッグバン的に家庭でも学校でもないところに形成される「見えないコミュニティー」に参入する現象が見られる。

中学校の運営方法の分岐点

中学校は適応の困難な環境ではあるが、適応できてしまえば学習への動機づけは比較的容易に得ら

れる。仮に適応できないとしても高校受験というハードルがあるために、中学卒業の時点では中学卒業程度の知識や技能をなにはともあれ身につけることができている。

しかし、中学校の三年間に学校文化への適応に多大な労力を費やすために、高校に入学するや、学校に通いつつ心は学校から離れていく。このため、高校生活が「とりあえず卒業する」以上の意味をもちにくくなり、高卒で教育を終える生徒たちに、高校卒業程度の知識や技能を身につけさせることが困難になっていると思われる。

中学校の運営方法について、今、我々は分岐点を迎えている。一つの方向は、現状の学校文化を維持すること。もう一つは、社会一般の環境にあわせて中学校の学校文化

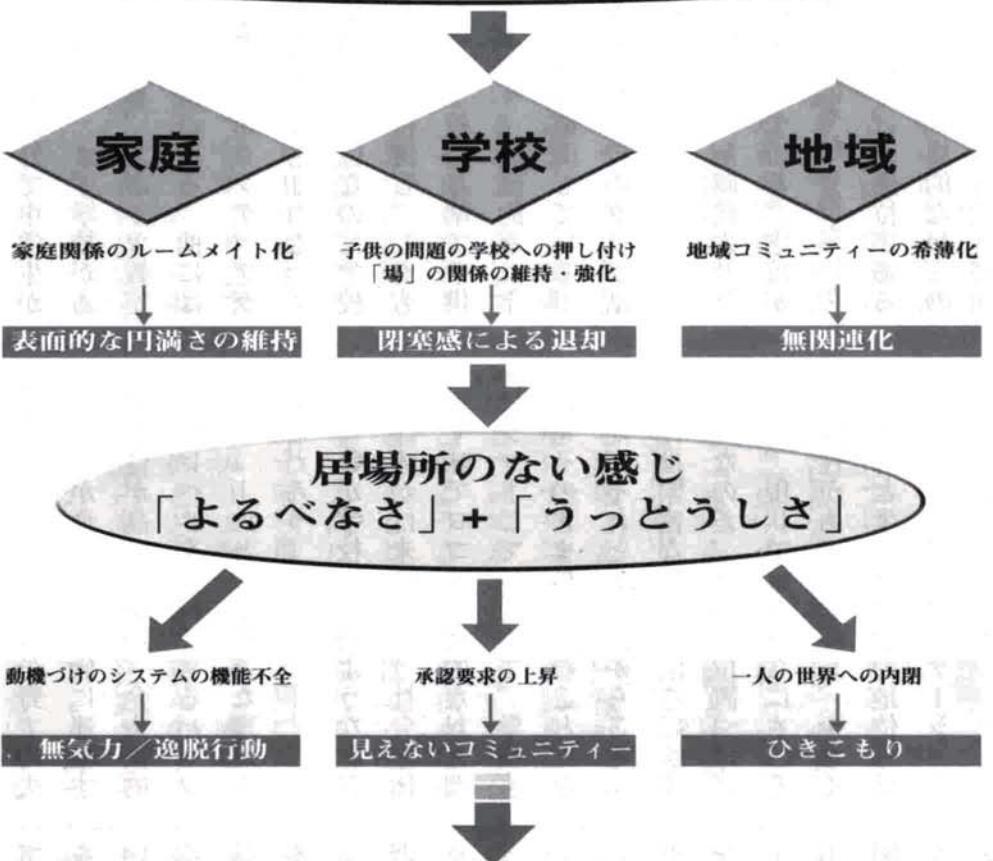
を再編成することである。言い換れば、前者は「場」の論理の維持、強化であり、後者は「連」的環境へのシフトである。おそらく時代の趨勢から見て、後者の方向へ時間をかけて進んでいくのだろう。分岐点とはいうものの、この選択は「二者択一的なものではない。

「連」的関係とは

社会全体が「連」的関係の方向へ変化していく時、学校という環境はどのようなものになるのだろうか。「連」的関係は以下のように要約される。

- ① 部分的帰属（非全人格的帰属）
- ② 多重帰属
- ③ 規範的一般性
- ④ 一定の距離感のある対人関係
- ⑤ ヨコナラビの関係（非「タテ社会」）
- ⑥ ルールによる行動の制御

豊かな社会の表現による「場」の必然性の低下



「連」的関係への対人関係の再編成

- ① 非全人格的帰属
- ② 多重帰属
- ③ 規範的一般性
- ④ 一定の距離感
- ⑤ ヨコナラビの関係
- ⑥ ルールによる行動制御

①と②は相互に関連するものである。現在、家庭以外で中学生が帰属しているのは、まず学校があり、塾やけいこ事、スポーツ教室などの「準」学校がある。他には地域の子供会や、ボランティアグループなどもあるかも知れない。

しかし、圧倒的に優位なのは学校で、家庭と学校を往復し、しかも家庭内でも親が学校の基準で子供を評価するという、圧倒的な「学校化」に中学生は直面している。余暇活動までもが学校のクラブ活動として運営されている状況もある。これは終身雇用制時代のサラリーマンによく似ている。学校が優位にあることはやむを得ないが、あまりにも学校だけが優位にある状況と言える。全人格的な單一の帰属先をもつことは、そこで良好

う状況は、生徒は学校に全人格的に帰属するという前提があつて初めて可能となる。これは汚職事件があるたびに指摘される、会社と社会との間の二重規範の問題と並行するものだ。社会全体において不法行為とされることが、会社の内部ではむしろそうすべきこととされ、迷わず会社内部の行為規範に従う会社員がいるのは、会社に全人格的に帰属し、そこを離れては生きていくことが非常に困難だというメカニズムによるものだ。学校と社会が同一のルールによって運営されることで初めて社会全体のルールも次世代にうけつがれていくことに留意しなければならない。

自己決定・自己責任

さらにつけ加えるべきこととして、「自己決定／自己責任」の問題がある。「場」的論理を軸とする社会から、「連」的論理を軸とする社会への変化の中で、急速に浮上しつつある問題である。「場」は社会全体の中にやや特異な保護膜を提供してきた経緯があり、「場」の解体は、このような保護膜を我々は期待できなくなり、いわば「一人で生きる」方向に押しやられることが意味する。「自己決定／自己責任」というルールは、金融ビッグバンの問題にとどまらず、我々の生き方の問題になつてくる。社会が「連」は各種の保護膜を失い、否応なしに「自己決定／自己責任」という

な自己像を獲得できる場合には問題ないが、何か一つの分野での失敗や低迷が全人格の評価に連結する可能性が高い。結局、全方位的に平均レベルを獲得できるパーソナリティーにとつて快適な環境と言えるだろう。

④と⑤が学校にどのような影響を及ぼすかは未知数だ。社会全体がうす味でヨコナラビ的な対人関係にシフトしていく中で、学校もそれをそのまま持ち込むことになるのか、それとも、だからこそ学校だけは緊密な集団生活を経験する場所なのだ、という位置づけになるか、現状ではどちらにもころぶ可能性がある。しかし、少なくとも教師と生徒との間の地位の落差を利用してコミュニケーションを維持するというテクニックはう

ルールに従わざるを得なくなる。誰も自分を保護してくれない以上、自分の判断を尊重し(この場合、判断材料としての情報公開が前提となる)、その結果も自分で引き受けらるしか方法がなくなるわけだ。学校はこれまで様々な保護機能を提供してきた。要約すれば、学校の言うことを聞いていれば、まことに、教師は一体どれほどの負担を強いられてきただろう。この重い負担を教師が甘んじて受け入れてきたのは、教師も終身雇用される労働者だったということが関係している。終身雇用制の終焉に

まく機能しなくなるだろう。かつてのような圧倒的な知性と道徳性をもつた人物という教師像は、ずいぶん前からすでに空文化している。無理に無理を重ねて、地位の落差を軸とするコミュニケーションをなんとか維持している印象だ。

③と⑥は、ややもすると、細かい校則を決めることと混同しそうだ。ここで言うルールとは、社会全体で共有されている最低限のルールが、学校内部でもそのまま通用するという意味だ。合理的な範囲を超えて学校が社会全体とは異なるルールをもつ、つまり社会と学校との間に二重規範があるとい

れる。保護機能を維持できずに、学校もまた「自己決定／自己責任」というルールに従つていく背景には、社会全体の動きの反映という面と、さらに教師の勤労形態の変化という面もあるのだ。学校、中でも公共サービスとしての公立学校は「自己決定／自己責任」というルールのもと、大幅に機能削減されていくだろう。

「場」の変化と学習動機付けの多様化

「場」の論理を軸とする社会では、よりよき「場」を獲得することができより安定した人生を約束するルートとなる。ほとんどすべてと言つていいほど多くの若者が厳しい受験競争に何らかの形で参加せざるを得なかつたのは、よりよき

学歴が、よりよき「場」を獲得するのに非常に有利だと多くの人が考えたからに他ならない。極論すれば、学習の動機づけは、受験競争からおのずと供給されてきたのだ。このようなシステムがおよそ半世紀も続き、この間、教師たちは生徒を学習に動機づけるテクニックを開発する負担をかなり免除されてきた。

「場」の論理を軸とする社会から、「連」の論理を軸とする社会へシフトしていく中で、受験競争も意味あいが変化していかざるを得ない。

固定的な「場」を獲得することではなく、市場で価値をもつ資質や技能を身につけることが人生の安定にとつて有利であるという状況に置かれることは、学習への動機づけが、当面のバリヤーを突破

するという単純なものから、長期的な視野に立つた、より個別的な内容へと多様化していくことを意味する。極端に公式化していくことを意ら、学習への動機づけは、単一のものから、複雑で多様なものへと変化する。ここから、生徒本人あるいは保護者の学校への期待も変化し、多様なニーズに対応し、それぞれで独自の動機づけのテクニックをもつプロフェッショナルのサービスを享受することに重点が移動する。いわば教育の「多品種少量生産システム」に関心が集まるわけだ。

このニーズに応えるためには、学校自体も、また学校の内部も、多

様なプログラムのラインナップを可能にするオペレーションシステムに変更する必要がある。学校の多様化と、自己責任にもとづく選択の自由、というシステム的基礎の上に学校が運営されることになつていくだろう。この中でどのよううに学校内に連帯感を生じさせるのか、ということに危惧をもつ議論も現れるだろう。この議論の弱点は、連帯感は同質性からしか生まれないのかということにある。「場」の論理の中で300年もの間に生きてきた日本人は、同質性が連帯感の唯一の発生源であると考えがちだ。しかし、「連」的社會が「連」的人格を形成し始めれば、その人格は、異質性の中に連帯感を見いだすというコミュニケーション・モデルを身につけることもあるだ

ろう。だとするなら、多様化が連帯感を阻害するという議論は意味をもたなくなり、多様化と連帯感が矛盾なく両立することになる。300年目に迎えた社會の基本的な枠組みの大変動期にあって、我々は様々な問題で岐路に立たされている。「中学生の動機づけ」というごく小さな問題一つをとつても、このことが色々な角度から影響を投げかけている。それがあるべき姿であるかどうかはさておき、多様化は我々の社會の趨勢であり、学校もまた例外ではないだろうという予測が成り立つ。勤勉革命以後この300年間、我々は「明日のために今日を我慢する」とをしてきた。我々の動機形成のメカニズムにはそういう抑圧的な色彩がつきまとつている。学校の

勉強も、受験という「明日」のために、様々な内発的な動機—音楽を聞きたい、テニスをしたい、恋愛したい、おしゃれをしたい—と一緒に「今日」を我慢することの上に成立してきた。だから、受験という重石がとれた瞬間、学習の意欲が雲散霧消する。このため、知識や学力のピークが最終学歴の卒業時ではなく、最終学歴となる学習を受験した時点になるという奇妙な現象が現れた。よりよき「場」を獲得する競争が意味を失う時、受験競争の意味も大きく変化する。その時、いかにして若い世代を学習に動機づけるかという問題は、今から真剣に考えておく必要があ

ベネッセ教育研究所 研究所報 vol. 15

「中学生のもつ『場』における意欲」研究報告書 シリーズ発刊のお知らせ



研究所報vol.15-2

学びの場の創造

～個性的成長と集団過程の充実が
両立する学びの「場」～

執筆 奈須 正裕(国立教育研究所)



研究所報vol.15-3

学校と家族

～中学生の意欲と彼らを取り巻く
ふたつの「場」～

執筆 田村 肇(東京学芸大学助教授・精神科医)



研究所報vol.15-4

ネットワーク化社会の動機づけ

～他者の視線のない生活空間を
めぐる問題～

執筆 岩間 夏樹(ライズコーポレーション代表取締役)

今回の研究では、中学生の「意欲」を、「場」という日本人になじみのある概念を用いて、3つの視点で追求してきました。

タテの関係による一方向の情報伝達システムとしての「場」が意欲形成にはもはや機能しなくなり、自立した個人、多様な個性が尊重され、個人個人が互恵的な関係をつくる「場」が必要になってきている、という点については3つの研究の見解が一致しました。中学校の先生方ももつとも関わりの深い「授業」場面でも、個性が生かされ、なおかつ集団としても充実する授業の場をつくることが可能だ、ということを示されました。

これから、学校を含めた教育環境が大きく変わろうとする中で、中学生がいきいきと活動できる「場」をつくり出すには、生徒の意欲形成に大きく影響を与える先生方ご自身の価値観を変えていくことも必要ではないでしょうか。この冊子が、先生方の学校での指導に少しでもお役に立てれば幸いです。今後も子どもたちの視点から教育を考え、役立つ情報を提供し、先生方を応援してまいりたいと思います。(小泉 和義)

奈須正裕(国立教育研究所教育方法研究室) 研究レポート1執筆・座談会
田村 肇(東京学芸大学助教授・精神科医) 研究レポート2執筆・座談会
岩間夏樹(ライズコーポレーション代表取締役) 研究レポート3執筆・座談会
嶺岸秀一(千葉県八千代市立勝田台中学校教諭) 座談会
平成9年度千葉県長期研修生

研究所報

Vol. 15-1

「中学生のもつ場
における意欲」
研究報告書

発行／1998年(平成10年)5月1日

発行人／福武總一郎

編集人／島内行夫

発行所／株)ベネッセコーポレーション

製図・製版・印刷・製本／株)シンプレス

編集・制作／ベネッセ教育研究所

スタッフ／デザインオフィス キャン
表紙デザイン／中村ヒロユキ(Charlie's HOUSE)

編集後記